

知恵の書 1章 16-2章 1、12-22節

ヤコブの手紙 3章 16-4章 6節

マルコによる福音書 9章 30-37節

本日から公祷の礼拝を再開いたします。感染対策をしっかりと行い、制限のある再開ですが、礼拝をご一緒できますことを喜びたいと思います。ただし、くれぐれもご無理ないようお願いいたします。

さて、本日の福音書のお話は、イエス様の二回目の受難予告と、弟子たちが自分たちの中で、誰が一番偉いか議論している個所です。しかし、聖書日課では、間のお話がかかなり飛んでいます。それは、先週の福音書個所が、二か所選択であったことと、もともと聖書日課ではお話の一部が省略されていたからです。

『聖餐式聖書日課』に、福音書のすべての箇所を掲載できないのは仕方ないことですが、かなり大切なお話が省略されています。また、「マルコによる福音書」は、お話の流れが大切な物語ですので、省略された部分を簡単に補いたいと思います。

先週の福音書箇所（8：27-30〔9：1〕）は、ペトロの信仰告白の箇所と、イエス様の最初の受難予告でした。そのお話では、イエス様とペトロとの厳しいやり取りがあり、イエス様があらためて、従うとはどういうことかを教えておられました。

『聖餐式聖書日課』では、そのあと9章14節からのお話には、それも選択肢の一つとして飛びますが、それらの話との間の2節から13節には、イエス様の姿が変わる、いわゆる「山上の変貌」のお話があります。先週、その日のお話が、「マルコによる福音書」の大切な転換点であるとお伝えしましたが、この「山上の変貌」も同じ意味で重要な出来事です。弟子たちとの無理解がより明確になっている個所だからです。イエス様の山上の変貌を目撃したのは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人だけですが、その代表のペトロは、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです」

（9：5）と的外れのことを語ってしまいます。そして、そのペトロの言動とは「ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである」（9：6）と語り手によっても明確に説明されています。ただし、イエス様が洗礼を受けたときと同じように、「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』」（9：7）と声がします。「これに聞け」とありますが、この部分を直訳すれば、「あなたがたは彼から聞きなさい」です。具体的に言えば、イエス様に聞きなさいということです。実際、お話の中で、弟子たちはイエス様にいろいろと尋ねる

のですが、それでも理解できなかつたのです。そして、イエス様に質問されても、答えないようにもなります。本日の箇所は、その一つです。

先週、選択となっており省略してしまった箇所(9:14-29)は、「山上の変貌」の出来事が終わり、イエス様のペトロ、ヨハネ、ヤコブの三人がおりに来たところの場面です。彼らは、他の弟子たちが、霊に取りつかれて、話ができない子どもの癒しに失敗しているところに出会います。そこでは、イエス様が信仰のない時代を嘆いています。お話の最後の方で、弟子たちは、「密かに」自分たちの失敗について訪ねます。弟子たちは、「山上の変貌」のお話で、イエス様に聞けという言葉を実践したといえるのですが、「密かに尋ねた」のでした。この「密かに」とは、公の前ではなく、内々にということです。つまり、群衆に知られないようにという意味にもなります。弟子たちはイエス様から、「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」(9:29)と改めて教えられますのですが、それまでは、奇跡に成功していた弟子たちが、なぜ失敗したのか、それは、「祈らなかつた」からでした。そのことは、弟子たちが、「祈ること」を忘れて、自分たちの力だけで悪霊などを追放できる、自分たちにはもうそのような力がある、そう勘違いしたということを暗示しています。弟子たちの力は、弟子たちの人間としての能力が向上したのではありません。イエス様から授けられた権能であり、祈りを通じた信仰による力であったからです。

さて、本日のお話は、それらの出来事の続きです。しかし、癒しに失敗した弟子たちは、それまでのことを反省した様子はありません。カファルナウムに着いてから、イエス様が「途中で何を議論していたのか」と尋ねると、「彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである」(9:34)とあるからです。

弟子の中で誰が一番偉いか、ここで「偉い」という言葉は、「大きい、偉大な」という一般的な意味の形容詞ですが、何を基準にしてそう決めているかわかりません。しかし、癒しの能力、イエス様の言葉をどれだけ覚えているかなど、人間的判断が基準になっていたと思います。弟子たちは、自分たちのそれらの能力がどのようにして備わったのか、また何のためにあるかを無視して議論していたのでしょう。

そのような弟子たちを、イエス様は改めて教えます。ことに「十二人を呼び寄せて言われた」ありますので、弟子の中でも特別に任命した12人に限定しています。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」(9:35)、このイエス様の言葉は非常に有名です。そして、単に謙遜でありなさいと教えているわけではありません。物語の文脈で意味する内容は、主なる神様の御心は、人間の力によって行われるものではなく、信仰による力によって行われるものであり、その信仰の力とは、人間の尺度による能力の高さや強さとは異なる、ということを示しています。人間は、どれほど優秀であり、力強くても、主なる神様に勝ることはないからで

す。また人間は、どんなに努力しても、不完全であるからです。しかし、あえて、すべての人の後になり、仕えるものとなる時、自分の力では知ることのできなかつた何かを知ることができる、そして、自分でも思いもしなかつた何かができる。そのようにイエス様は語っているのです。

これらの教えを深めるために、イエス様はさらに、子どもをたとえとします。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」(9:37)。この言葉も有名です。ことにキリスト教幼児教育では必ず触れる箇所でしょう。ここでの「子ども」の年齢定義を厳密にできませんが、だいたい6歳から7歳以下と考えてよいと思います。そして、この部分も、単に子どもを受け入れなさいと語っているではありません。また、イエス様の時代は、子どもの人権という概念など考慮されませんが、子ども的人格を認めて、尊重しようという意味でもないと思います。子どもを受け入れる理由は、「わたしの名のために」であり、「わたしを受け入れるのである」ことであり、そして「わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」と語っているからです。

子どもを受け入れることとは、主なる神様を受け入れることと同じだということ。この教えは、すこし先の箇所ですが、「**子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない**」、あるいは「**神の国はこのような者たちのものである。**」というイエス様の言葉と類似するところがあります(10:13-16)。イエス様が、子どもを高く評価し、あるいは受け入れることを大切だとしているのは、子どもが純粹だからではありません。誰かがいなければ生きていけない、依存的な存在であるからです。

大人になるということの意味は、何でも自分でできるということとイコールとなる場合があります。精神的にも、物理的にも、あるいは金銭的にも自立するのが大人と言えるかもしれません。しかし、どの社会でも、どの年齢でも、人間は一人では生きていきません。社会は一人ではつくられていないのです。逆に言えば、自分ひとりで何とできるというのは、思い上がりであり、また自分一人で何とかしようと思うからこそ、悩みが深くなるのです。

子どもは、自分で一人では生きられない存在です。だから、子どもを受け入れて、その姿を見る時、自分自身も大人であっても、社会では一人では成立しないことを改めて学びます。そして人間同士が支え合うことが大切だということのみならず、自分たちが自然環境に頼りまた支えられていること、何より主なる神様に頼らなければ、死は単なる終わりであり、本当の意味で生きていけないこと、それを悟ることができる、イエス様はそう教えているのです。そしてそのことを示すために、あえて敗北の象徴である十字架の姿を通して、人間のありとあらゆる限界を示されたのです。

十字架の死とは、人間の力の限界、思いの限界、知恵の限界でもあります。しかし、イエスを殺害して勝利したと思うような人間の限界でもあります。復

活が、そのような思いも主なる神様の愛によって打ち消されることが示されるからです。

さて、旧約日課は、「知恵の書」です。旧約続編です。それは、旧約聖書と新約聖書の間時代時代の文書であり、最初の教会の人々は『聖書』の一部として読んでいたと思います（プロテスタント教会では、『聖書』に含まれません）。本日の「知恵の書」は、旧約にある箴言やコヘレトの言葉などの知恵文学をさらに展開させた文書です。ただし、知恵について語っていますが、人間的な知恵ではありません。つまり、体験したり、学習したりして習得する知恵ではなく、主なる神様を信じ、恐れることを通して得られる知恵です。本日の箇所は、その大切さを、「神を信じない人」の有様を通して、逆説的に示しています。そのような人々の姿は、まさに思いあがった人の在り方であり、謙虚さも全く感じられない姿です。文化も時代も、現代のわたしたちと異なりますが、共通する響きがあるように思えます。大人とは、神様などに頼らないで、自分で何でもできる人と定義すれば、その響きがわかります。

本日の福音書のお話にある弟子たちは、このような「神を信じない人」たちではありません。むしろ、イエス様を通して、新しく、そして動的に主なる神様を信じている、従っている、そして、力をもっていると思った人々でした。しかし、そこにも落とし穴がありました。イエス様の力にしか注目せず、誰が一番偉いかを議論してしまっていたからです。

イエス様は、単なる知恵の教師ではありません。また単なる奇跡行為者でもありません。もし単なる知恵の教師であったならば、また奇跡行為者であったならば、十字架に掛る必要はなかったからです。

しかし、イエス様は、今日の言葉にあるように、知恵の言葉を語っています。それらの知恵は、知恵を求める人の知的学びを深めるためではなく、今苦しんでいる人、悲しんでいる人、飢えている人、それらの人たちを慰めるためでした。イエス様は、奇跡を行いました。それは、そのような慰めを具体化するためでした。そして、イエス様は、十字架にかかられました。それは、イエス様が語る知恵も慰めも、そして具体化するも、快く思わない人、そのような人たちを受け入れるためでした。平たく言えば、すべての人が慰められ、喜びに満たされ、救われるためでした。そして、十字架で示された事柄は、一部の人の平和ではなく、すべての人の平和であり、本当の命でした。

テクノロジーが発達した現代でも、人間は人間です。人間の限界は変わりません。それゆえに主なる神様を信じること大切さは変わりません。わたしたちは、その主なる神様を、イエス様を通して、しっかりと信じる集まりです。その集まりが、再び始まりました。まず、そのことを改めて喜びたいと思います。そして、コロナ禍による長い公禱の礼拝休止の時は、弟子たちの失敗とは全く異なりますが、その時があったからこそ示される、新しい歩みをご一緒に祈りながら訪ね求めていきたいと思えます。そして、その歩みが、より恵み豊かな未来につながることを願いつつ、具体化していきたいと思えます。